

東北師大学報一九八二年第二期掲載論文

鼻音 n, ng と撥音「ん」の関係から見た 中国語の日本語に対する影響

劉 富 華

訳：沼 野 治 郎

日本語の系統の問題に関して、現在言語学界に定説がないにもかかわらず、中国語が日本語の形成と発展に著しい影響をおよぼしたことは、否定し難い客観的な事実である。

中国語の大量の流入は、日本に書き言葉を生じさせ、漢字と仮名の混淆文を生じさせた。大量の漢字と中国語語彙が日本語に吸収され、日本語の根幹を占めるに至り、日本語の文字体系形成の基礎となり、基本的語彙の主要部を占めている。このことは、すでに衆人の認めるところである。しかし、音韻体系の面において、日本語が中国語の漢字音を模倣し吸収したこと、そして更に重要なことに、その間の複雑な音韻現象の背後に対応規則が存在していること（これは同一の系統に属さない言語間では、確かにあまり見られないことではあるが）は、しばしば看過されている。通常、音韻対応が規則をもって現れるのは親縁関係にある言語間であると考えられている¹⁾。日本語と中国語は同一語族に属しないと結論づけられているので、両者の間に音韻対応の規則があるかどうかについて注意を払う人は大変少ない。

いかなる言語も皆、音韻体系と語彙体系が合わさってでき上がっている。中国語から借用し、吸収した日本語は、当然その外殻である中国語の漢字音の影響を免れないし、これを免れることは不可能である。若干の日本の言語学者は、日本の漢字音は古代中国語音の延長であり、中国語音がなければ日

注1)「辞海・語言文字分冊」13頁。

本の漢字音は存在しなくなることを認めている²⁾。言語現象からみると、日本語で「人」を「にん」、「じん」、「山」を「さん」、「茶」を「ちゃ」と読む等々は、決して ad hoc なことでも偶然でもない。両言語の音韻の歴史的な変遷と特徴を比較分析しさえすれば、中日両言語間にある本質的、普遍的かつ必然的關係、すなわち音韻対応の規則があることに気づくであろう。例えば、古代中国語入声の漢字の末尾の音は、日本語で「クキツチフ」の音節にきちんと対応する。古代中国語で〔m〕の子音で始まる漢字の呉音は、マ行に対応し、漢音は、バ行に対応する。また〔n〕の子音で始まる漢字の呉音はナ行に対応し、漢音はダ行に対応している。つまり、中国語の発音のどの特徴も、また変遷をたどってきた各段階における発音の変化も、ほとんど皆日本語の中に、それに相応する形で存在する。あるいは完全に対応する音韻体系があるように思われる。本稿では、ただ中国語の鼻音 n, ng と日本語の撥音「ん」の間の関係を、音韻史上の変化と中国語および日本語の古代と現代の漢字の読み方の比較から、両言語の漢字音の間に見られる対応規則を探究することにする。

撥音「ん」は漢字伝来と共に生じた。日本語は、音節文字からなり、一つの仮名（拗音の場合は二つの仮名）が一つの音節単位を表す。日本語が実際に使用する音節の数については、諸説がある。實際上、基本の音節は46しかない（拗音、拗長音、濁音、半濁音それに重複するものは含まない）。これは五十音図中の45の清音と撥音「ん」である。

「ん」は特殊な音節で、いかなる状況下にあっても清音のように独立して用いられることはないし、促音の前後につくこともできない。必ずそれ以外の仮名のあとについて現れ、一モーラの時間を占める。そこである人は、「ん」はモーラ、あるいはモーラ音素であるという³⁾。またある人は、後続子音の待機音と称し、中国語の鼻音と入声音と関係があるとしている⁴⁾。

2) 後藤朝太郎、「漢字音の系統」昭和21年版19頁。

3) 岩波講座「日本語・文字」38頁。

4) 天沼宇、水谷修、大坪一夫「日本語音声学」くろしお出版。

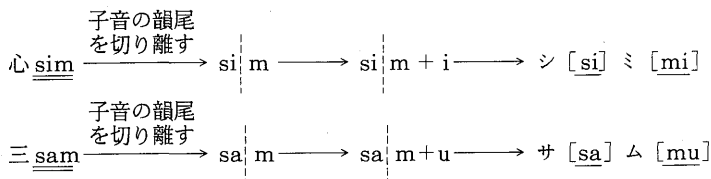
撥音「ん」は日本語の中の鼻音音節である。その主な機能は漢字の音を表すことであり、漢字が大量に日本に伝来した時期に発生している。

漢字が日本に入る前、日本固有の和語の中に撥音「ん」はなかった。五十音図が出現する前、涅槃経に基づいて創った「いろは歌」の47の仮名の中に「ん」はない。広辞苑は「ん」の項目の所で、中国が現在用いている「无(無)」の字が「ん」の元の字であって、和語の方で「無」の意味を表しているのは「ム」である、と説明している。橋本進吉も撥音「ん」は平安朝後期に生じたと見ている⁵⁾。これらはいずれも日本固有の言葉の中に「ん」の音節が存在しないことを証明している。あるいは日本語の古い音の中に鼻音現象があったかもしれない。しかし決して今日のように一つの音節を構成したり、固定した表記を持ったりする撥音ではなかった。

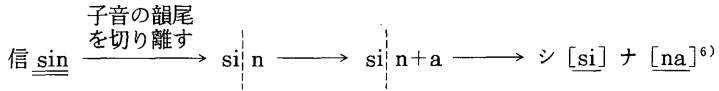
では、撥音「ん」は、どのようにして生じたのだろうか。

平安朝初期に、漢字が大量に日本に伝播し始めた。この時期の中古の中国語は、まだ陽声（訳者注：鼻音に終る韻尾を持つ音節）の韻の中に m, n, ŋ の鼻子音で終る音節を完全に保有していた。しかし、日本語の音節は、その構造の原則からいって、子音で終るものではなかった。そこで、中国語の音節末が子音で終る漢字を受け入れるため、同時に日本語の音節構造の原則にもとることのないようにするため、鼻子音の韻尾とその前の音素を切り離して、この韻尾の子音を初頭音の子音とする新しい音節を作ったのであった。このようにして、中国語のうち、陽声の韻の音節は、日本語の中でごとく二つの音節に変わっていった。

例



5) 橋本進吉, 「国語音韻の研究」岩波書店, 昭和32年版, 173頁。



これは鼻子音 m, n のあとに母音 u, i, a を加え、韻尾 m を新しい音節ム [mu], ミ [mi] に変えたものであり、韻尾 n を新しい音節ナ [na], ニ [ni] に変えたものである。心 [sim] をシミ, 三 [sam] をサム, 信 [sin] をシナと読んだ。これがすなわち「ん」に向かう過渡の段階である。漢字が引き続いて伝来し、影響し続けたので、徐々に「心」はシミからシンと読むようになり、「三」はサムからサンと、「信」はシナからシンと読むようになったのである。そこで「ん」が生じるに到った（時はおよそ平安時代後期）。このことから、日本語が漢字の発音を吸収したため撥音「ん」を生じたことがわかる。撥音「ん」の作用とその発生は、互いに関連している。それは一つには、漢語音を受け入れたとき、日本語の音節構造の原則に沿って行われたからであり、もう一つには、漢字および漢語の語彙に仮名を振ったことをあげることができる。言語現象の面から見れば、撥音で終る語は、日本固有の言葉の中で独立した音節としてはほとんど存在しない。逆に輸入した漢語の中に数多く見受けられる。例えば、「漢語（かngo）」、「先生（せんせい）」、「人民（じんみん）」等々いずれもそうである。不完全な統計によれば、日本語に入っている漢語のうち、撥音を含む語彙は30%前後に達し、しかも日本語のうち撥音のふり仮名をつける言葉は、ほぼ100%が日本語の語彙に入った漢語に由来している。それで、撥音「ん」は漢字の大量の伝来に伴って生じた、というのである。

撥音「ん」と鼻音 n, 長音 ng 間の音韻対応規則。日本語の中で漢語の鼻音が撥音で表示されていることは、一般に認められている⁷⁾。この見方は、多くの人が受け入れるところとなっている。表面的かつ一面的に見れば、撥音と鼻音は対応しているように見える。しかし一步深く分析すれば、特に音

6) — は旧音節を示し, — は新音節を表す。

7) 姜晩城:「日本語の『親属』と『隣人』」,『日語学習與研究』1980年第2期。

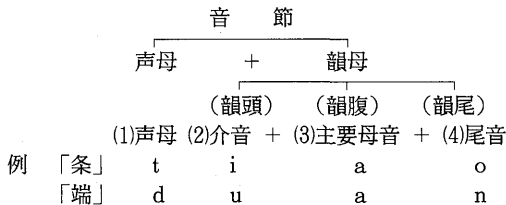
韻の歴史上生じた変化を考察すれば、このような見方が完全には正確でないことがわかる。

撥音は音便の場合と、否定の表現、それに少量の助詞として使われていることを除けば、主な機能は、中国語の鼻音を日本語に変えるのに当てられていることである。しかし、中国語の鼻音が全部撥音で表されているわけではない。日本語の他の音素が中国語の鼻音の一部分を表している。それで、撥音「ん」と鼻音 n, ng がイコールであると簡単に結論づけるのは、科学的ではない。

中国語の特徴は、韻頭⁸⁾と韻尾⁹⁾に目立って現れている。現代中国語の38の韻母¹⁰⁾のうち、16は鼻子音が韻尾にくる鼻韻母であり、その中 n を末尾に持つものと ng を末尾に持つもの（各8つ）が、種々の鼻音を前後に生じさせるのである。中国語のこの音節の特徴は、日本語の中にほとんどそのまま再現されている。両言語の間には、厳密かつ整った対応関係が見られる。

中国語で韻尾が鼻音になっている漢字は、中国語では一音節であるのに、日本語では必ず二音節に変っている。韻母の主要母音のあとに鼻子音 n [n], すなわち前鼻音を従えている場合、ことごとく日本語では第二音節を撥音「ん」に読んでいる。韻母の主要母音のあとに鼻子音 ng [ŋ], すなわち後鼻音を従えている場合、それは日本語ではことごとく長音¹¹⁾（拗長音を含む）になっている。すなわち、第一音節の主要母音が一拍延ばされている。言い換えると、撥音「ん」は中国語の鼻音のうち、前鼻音 n [n] だけを表し、もう一つの鼻音 ng [ŋ] は撥音を用いなくて、長音を用いて表している。

8), 9), 10) 訳者注：中国語の音節は次のように分析できる。



11) 以下長音は拗長音を含む。

1987年12月 沼野治郎：鼻音 n, ng と撥音「ん」の関係から見た中国語の日本語に対する影響

他の例 えいきょう, どうめい, えいゆう, のうこう, ふうけい
影響, 同盟, 英雄, 農耕, 風景等々。

以上の比較によって、撥音と鼻音 n, 長音と鼻音 ng の間の対応関係がおおよそ証明できた。この規則の普遍性を明らかにするため、中国語のすべての鼻音尾の音節と、その日本語の中における対応状況を、表にしてみた。(附表参照)

中国語の中で声母、韻頭、韻腹が同じ漢字でも、韻尾だけが n, ŋ と異なるため、日本語という異なった状況の中でもその違いが対応して現れていることが、この表から明確に読み取れる。

切韻陽声系統の証明。言語は集合体であって、生成と変遷の過程を経ている。したがって、われわれは、言語の変遷をもたらした多様で複雑な内因と外因、また音韻の通時的变化と音韻の特徴の面から、深く詳細に分析・考察しなければならない。それを行なって初めて、音韻対応の規則の背後にある原因を明らかにすることができる。

地理的に見て、中国人と日本人は一衣帯水の間柄である。歴史的に見て、中華民族は、政治経済の面で栄え隆盛を極めたのみならず、文化の面でも栄え進歩を遂げた。そしてかつては文明発祥の地の一つであった。日本民族は、紀元 4・5 世紀になって初めて、中国の巨大な文明の影響下において歴史時代に入ったのであった。これをメソポタミヤ、エジプト、インド、中国という文明発祥の地と比べると、二千～四千年くらい遅れている。それに日本民族には、「嬰兒が母乳を求めるように他民族の進んだ文明を吸収する¹²⁾」という特徴がある。したがって、日本語の生成と変遷の過程において、漢民族の進んだ文化の影響を摂取したことは、歴史の必然である。

言語はそれ自体、他の事柄と同様たえず変遷し、変化をとげている。中日両国語の漢字の読みが昔から今日にかけて変化したことで、隣接して互いに影響し合ったことは、互いに深い関連があった。しかし、相互に影響し合う

12) 井上清, 「日本歴史」天津人民出版社, 1974年版。

と同時に、それぞれ独自の道をたどり、独特の規則によって、変遷し、変化をとげてきたのであった。したがって、現代語の比較だけ行っても、漢字が輸出された当時、どのように漢字音が変わったかその本当のところを知ることにはできない。そこで通時的に両国語の音韻変化を、また漢字に対し日本でのような読みを与えてきたかを更に深く比較分析する必要がある。

以上われわれは、中古の中国語の切韻で鼻子音 m, n, ŋ が韻尾にきている韻と、中古の日本語におけるその漢字の読みおよび音価を比較することにする¹³⁾。

尾音が -ŋ の通, 江, 宕, 梗, 曾の五摂¹⁴⁾。

韻	東	東	東	鍾	鍾	冬	江	唐	唐	唐	陽	陽	庚	庚	庚
韻母	uŋ	iuŋ	uŋ	ʔwoŋ	ʔwoŋ	uoŋ	oŋ	aŋ	aŋ	uaŋ	iaŋ	ʔwaŋ	eŋ	ieŋ	ʔweŋ
例	工	弓	蓬	容	封	冬	江	剛	当	光	央	王	更	英	永
仮名表記	こう	きゅう	ほう	よう	ほう	とう	こう	こう	たう	くわう	やう	わう	かう	えい	えい
日本語音価	ou	juu	uu	jou	ou	ou	au	au	au	wau	jau	wau	au	ei	ei

韻	耕	耕	清	清	青	青	蒸	登	登
韻母	æŋ	wæŋ	ieŋ	ieŋ	ieŋ	iweŋ	ʔeŋ	uəŋ	əŋ
例	争	轟	鄭	精	丁	肩	孕	肱	恒
仮名表記	そう	くわう	てい	せい	てい	けい	よう	こう	こう
日本語音価	au	wau	ei	ei	ei	ei	jou	ou	ou

この表から、中古の中国語で韻母が ng [ŋ] で終る漢字は、皆中古の日本語でウ [u] またはイ [i] で終る音に読まれていることがわかる。

どうしてこのような対応となって現れたのだろうか。両言語の音節構造の特徴から分析してみよう。いかなる言語の音を他の言語の音に移そうとして

13) 本文が用いている切韻に基づく音声表記は、王力の「漢語史稿」に依っている。日本語の音価は橋本進吉の「国語音韻史」、藤堂明保「漢字語源辞典」に依っている。平安朝時代の読みを表すのに歴史仮名遣を当てているが、印刷の都合から現代仮名で代えている。

14) 訳者注：漢字を音の区別に従って分類し配列した字書を韻書と呼ぶが（切韻は601年に編定された韻書）、その中である韻を共通して持つ漢字を代表して一字がそのグループの名前として用いられる。摂は、その韻を持つ漢字グループを指す単位名称のようなものである。

1987年12月 沼野治郎：鼻音 n, ng と撥音「ん」の関係から見た中国語の日本語に対する影響

も、その移された音が音価の面で、どうしても元の言語の音と完全に符号しないで、いろいろ複雑な状況を呈することがしばしばある。中国語の音を日本語に移すに際して上記のような同類の音が、異なった種類の音になるのは、日本語が中国語の影響を受け、中国語の音の一部を吸収する反面、日本語に固有の特徴が制約となってその枠から抜けられないためである。

日本語は中国語と比較すると、音韻面で一つの顕著な特徴がある。それは音素が少ないことである。現代中国語の子音音素は22で、母音音素は9つであるのに対し、日本語の子音音素は13で、母音音素は5つである。音節数から見ると、万葉集、日本書紀は87種の音節からなり、古事記は88種の音節からなっている¹⁵⁾。日本国語学会編の「国語音節一覧表」は102種をあげている¹⁶⁾。それに対し、中国語は、声調の別を数えないで411種あり、声調の別を数え、儿化音を加えると1,600余种におよぶ¹⁷⁾。音節は音素の組合せであるから、音節上の差違は音素の差違を表している。その上中国語の音素は、昔から今日にかけて数が減少し、簡素化に向かっている。他方、日本語の音素は、昔から今日にかけて、増加しており、複雑化の趨勢にある。したがって中古の日本語は、音素が中国語より遙かに少なかったのである。このようにして、中国語の数個の音素が、日本語のただ一つの音素に置きかえられるという状況が生じたのであった。鼻音の韻尾もこのような状況にあった。切韻音系の m, n, ŋ の三つの鼻音音素は、日本語でただ一つの n の音（仮名の前後にくる撥音ではなく、m, n, ŋ 等の音になって現れるもの。「ん」の異音であって、厳密には音素ではない）が対応している。ŋ の韻尾は置き換えるべき相当の音素が見つからず、やむなく u, i の二つの母音で換えている。そして若干の陰声（訳者注：韻尾が母音である音節）の韻と混同することになっている。

音節を構成する要素の性質から見れば、中古の中国語にはすでに「之支脂

15) 大野晋, 「音韻の変遷」。(岩波講座「日本語の音韻」154頁)

16), 17) 望月八十吉, 「日本語と中国語の音節比較」。(「外国の言語学」1980年第4期)

微」等の韻尾が母音である陰声の韻があり、「東冬鐘江」等の韻尾が子音である陽声の韻，さらに「屋沃燭覺」等韻尾が塞音である入声の韻も存在した。後二者の閉音節は，日本語にはまったく存在しない。日本語の音節は一般に子音を初頭音とし，母音を末尾音としている（母音だけのものもある）。それで，中国語の韻尾が鼻子音 η の漢字音を日本語に移すとき，この特徴を保持しながら子音韻尾の η を母音の末尾音 u と i に変え，一拍延ばして二音節の読みにしたのである。

では，今でも中国語自身の変化の規則の中に解答を見つけることが可能であろうか。

羅常培の考証によれば，現代西北方言の鼻塞音の消失は，すでに唐の頃に始まり，鼻音 η は鼻擦音 r へに変わっている。この音は不安定で，大変弁別しにくいので，後続の字に極めて同化されやすく，母音に変わったのであった¹⁸⁾。羅氏は，更に中国語にチベット語の読みを並置した千字文と切韻の音，そして西北方言6種を比較している。例えば次のようである。

漢字	切韻の音	チベット語	蘭州	平涼	文水
東	toŋ 端東	ton	tuə	tuə ⁻	tu
星	sieŋ 心青	sye	ɕiə [~]	ciə ⁻	ɕiu ⁻
英	ieŋ 影庚	e	ie [~]	iə [~]	ie ⁻
康	koŋ 溪康	k'an	k'ɔ ⁻	k'a ⁻	k'a

これから η の韻尾がチベット語，蘭州，平涼，文水等の方言で消失の傾向にあることがわかる。

1930年新疆で発見されたウィグル語の「大唐三蔵法師伝」の中で，中国語の固有名詞につけられた標記を見ると， η の末尾音が消失している形跡が大変明らかである。例えば，長安 (coo-an)，大唐 (tai-to)，光 (goo) 等宕 dàng 摂の尾音 η は消失し，読みは長音化する傾向がある。また令 (li)，經

18) 羅常培，「唐五代西北方言」科学出版社，1961年。

(ki), 英 (i), 庚 (gi) 等々では、尾音 ŋ が消失し、母音は i だけになっている¹⁹⁾。

以上の事実は、漢字音の子音韻尾が徐々に失われ、鼻音の韻尾が簡略化されるのが、中国語の西北方言に見られる変化の規則と趨勢に同じであることを証明している。日本語が中国語の ŋ 韻尾の字に読みを与えようとしたとき、子音の韻尾が消失し、それに母音の韻尾を当てたのは、やはり中国語の変遷過程に見られるこういった規則の制約と影響を受けている。

切韻で韻尾が入声になっている音の変化について見れば、舌尖音 [t] と舌前母音 [i] は比較的近いので、韻尾消失後 [i] に集約され、[p] は両唇音なので円唇母音の [u] に同化されやすい。[k] 音はこの両方の傾向を持っているので、韻尾消失後あるものは [u] になり、あるものは [i] になる²⁰⁾。これは韻尾が陽声（鼻音）である音節の変化を直接証明することはできないが、切韻の分類で入声の韻と陽声の韻が対応していることに注目すべきである。すなわち、陽声の音節には韻尾が m, n, ŋ の三種があり、入声の音節にはこれに対応して k, t, p の韻尾で終る三種があって、「屋沃」と「東冬」、「曷末」と「寒桓」、「緝合」の「侵覃」が対照的に扱われている²¹⁾。したがって、入声の韻で塞音尾の k が u と i に変わり、これに対し陽声の韻で子音の韻尾 ŋ が日本語で u と i の音に移されているのは、一種の間接証明であると解することができるであろう。

19) 藤堂明保「漢字概説」。岩波講座「日本語・文字」127頁。

20) 張世祿、「日本の漢字音に基づいた入声韻尾の変化の研究」。語歴所研究周刊9集99巻（1929年）。

21) 訳者注：切韻系の中世の韻書「平水韻」の一部を、王力は次のように掲載している。（上声、去声の部分は省略。）

平声	上声	去声	入声
東 [oŋ]	—	—	屋 [ok]
冬 [uŋ]	—	—	沃 [uk]
寒 [an]	—	—	曷 [at]
侵 [əm]	—	—	緝 [əp]
覃 [am]	—	—	合 [ap]

王力、「音韻学初歩」商務印書館、1980年香港、p. 41。

上記の切韻の分類と中古の日本語の音価の比較から、韻尾が鼻子音の音節の日本読みは、漢字の主要母音の規制と影響を受けることが判る。漢字音の主要母音が a, o, u, a, ə 等広母音（中国語では「開口韻」）と円唇母音（中国語では「合口韻」）であれば、ŋ 韻尾の韻は aŋ → auŋ → au の傾向をたどって u の末尾音に到る。また主要母音が e, ε 等前舌母音であれば、ŋ 韻尾の音は ieŋ → ieŋ → iei の傾向をたどって i の末尾音に到る。これは言語音の変化が一般に省力の方向に向かうことによっている。

尾音が -m の深、咸の二摂。

韻	侵	覃	談	銜	咸	塩	添	嚴	凡
韻母	ĩem	am	am	am	em	ĩem	iem	ĩem	iwem
例	心	參	甘	銜	斬	炎	甜	劍	犯
仮名表記	しむ	さむ	かむ	かむ	ざむ	えむ	てむ	けむ	はむ
日本語音価	imu	amu	amu	amu	amu	emu	emu	emu	amu

古代中国語で末尾音が -m になっている韻は、日本語では皆ム [mu] が第二音節になって、おきかえられている。これはやはり両国語の音韻の特徴が相互に作用し合った結果このようになったのである。

中国語の音節では、母音のうしろに子音を従えることができるが、日本語ではできない。両国語のこの特徴があるので、発音を移すに際して子音の韻尾を必然的に変えなければならないことになった。そこでもとの音節の韻尾 m を初頭音とし、u (m は両唇音で円唇母音 u ともっとも同化しやすい) を末尾音として、新しい音節を構成したのである。このように -m を末尾音とする音節は、日本語では第二音節をム [mu] とする二音節の音に読まれたのであった。平安朝後期に撥音「ん」が出現した後、はじめて中国語の陽声の韻の m 韻尾と n 韻尾が一括して皆撥音「ん」を使って読まれるようになった²²⁾。

22) 橋本進吉、「国語音韻の研究」岩波書店、昭和32年版。

1987年12月 沼野治郎：鼻音 n, ng と撥音「ん」の関係から見た中国語の日本語に対する影響

尾音が -n の山, 臻の二撰。

韻	寒	桓	刪	刪	山	元	元	仙	仙	先	先	先
韻母	an	uan	an	wan	æn	iwen	ien	ien	ien	ien	ien	iwen
例	漢	端	班	闕	産	元	建	連	面	片	天	犬
仮名表記	かん	たん	はん	くわん	さん	げん	けん	れん	めん	へん	てん	けん
日本語音価	an	an	an	wan	an	en	en	en	en	en	en	en

韻	痕	魂	臻	真	諄	欣	文
韻母	ən	uən	ien	ien	iuen	iən	iwən
例	恩	坤	臻	因	春	斤	運
仮名表記	おん	こん	しん	いん	しゅん	きん	うん
日本語音価	on	on	in	in	iun	in	un

上記山, 臻の二撰の比較から, 切韻の分類の n 韻尾とそれに当てた日本語の音が完全に同じであることがはっきり判る。古代中国語の m, n, ŋ の三つの鼻音音素の中, 日本語ではただ一つ n の鼻音音素だけがその姿を残している。漢字の読みを移すとき, 当然同じ音素を取らなくてはならない。同じでないのは, 中国語の一つの音節がこの過程で二つの音節になったことである。n はもはや韻尾となるのではなく, 先行する仮名(音節)に続く一つの完全な音節となったのである。

以上言語の現象面から, また音韻の歴史を通じて生じた変化やその特徴の面から, 中国語の鼻音 n, ng と日本語の撥音, 長音の間の関係を, また両国語の発音の対応規則についておおよそ調べてきた。

では, 大量かつ繁雑に現れる言語現象の中で, 対応関係に合わない例外はないのだろうか。答えは有りである。

例。瓶 [p'ig] 詰 明 [miŋ] 朝 湯 [t'aŋ] 婆
 びんづめ みん ちょう たんぼ
 弓 [koŋ] 手 両 [liɑŋ] 個
 ゆんて りょんこ

ここで点をふった読みは、以上に提出した規則によれば例外である。これは、言語がそれぞれ発生過程と発展過程を経て今日の姿に到っているものであり、言語間の相互の影響が極めて複雑であること、時の経過とともに音が変化すること、地理上の距離から方言の違いが生じることに起因している。したがって、どんな音韻対応規則も例外の存在を免れることはできない。しかし、さらにつっ込んで研究すれば、例外の中にもそこに働く規則を発見できるであろう。

上の例外の場合を見てみると、このような例外の読み方の他に、別の読み方がある。すなわち、瓶(へい)、明(みょう、めい)、湯(とう)、弓(きゅう)、両(りょう)。これが規則に合致する読み方で、熟語でもふり仮名でも通常頻繁に用いられるもので、例外の読み方は規則に沿った読み方を補足するものにすぎず、稀にしか用いられない。こういった例外は、決して提出した規則を否定するものではなく、かえって音韻対応の規則が精密で、必然的に適用されていることをある程度証明していることがわかる。

訳者あとがき

私は「論叢」23号(1985年6月発行)で、「中国語の音節末の/n/の発音——特に母音が後続する場合——」と題する小論を発表した。その後まもなく、この劉氏の論文を入手し、内容が同じく中国語の/n/の音と日本語の撥音に関わるものであることがわかったので、このたび翻訳したものである。

劉氏の論旨の展開は、明快でわかりやすく、鼻音n、ngと撥音ないし長音間の対応を明示し、撥音が漢字の伝来によって生じたことを示している。そして、現代語の比較だけでなく、中古に逆のぼって通時的分析も行い、特にŋ韻尾の漢字が、日本語で[u]、[i]の長音になっている点を説明しようと試みている。中でも、中国語の方言の中に、ŋ→φの傾向が見られるものがあることを、例をあげて示していることと、入声の韻尾p、t、kの漢字

1987年12月 沼野治郎：鼻音 n, ng と撥音「ん」の関係から見た中国語の日本語に対する影響

が陽声韻尾の m, n, ŋ の漢字と組になって、韻書に掲げられていて、k も ŋ もともに日本語で u, i になって現れていることを、一つの重要な手がかりと見ているのは、大変興味深い。

ここにはあがってこないが、促音も漢字音と相関性があることを含めて、案外、劉氏のいうように、同一系統に属さない両国語であるが、音韻面で予想以上に中国語の影響を受けているのかもしれない。

劉氏の論文について、氏が中で「初歩的段階として」と数度断っているが、明快なだけに、逆に分析の深さの点で幾分物足りなさや、埋めるべき説明の不足を覚えたりする。例えば、シナ→シン、サム→サン、ŋ→u, i の変化について、規則（ルール）をあげて仮説を立てることもできるのではないだろうか。また326頁2～5行の部分は、藤堂明保「漢字概説」にそのまま依存しているようであるが脚注がない。

私の小論との関連でいえば、もちろん劉氏の論文には、撥音の調音の点では何の言及もないのであるが、私の観察が正しければ、中国語でも [n] の発音のとき、環境によっては、舌先は歯茎（alveolar ridge）についておらず、日本語の撥音に大変似ている。これは恐らく影響し合ったというより、いずれも自然に、個別にそのような調音上の特徴をもって発音されるようになったものであろう。

終りになったが、翻訳に当たって伊井健一郎先生に校訂の手をわずらわせた。多忙にもかかわらず必要な助力をいただいたことに厚く感謝の意を表す。

[附表] 中国語の鼻韻尾の音節と日本語の音読

韻母 日本語読み 声母	an	ang	en	eng	in	ing	ian	iang	uan	uang	ong	iong	üan	ün	uen	ueng	
	[an]	[aŋ]	[ən]	[eŋ]	[in]	[iŋ]	[iɛn]	[iaŋ]	[uan]	[uaŋ]	[oŋ]	[ioŋ]	[yɛŋ]	[yn]	[uəŋ]	[uəŋ]	
零声母	あん 案		おん 恩		いん 因	えい 英	えん 煙	よう 様	かん 完	おう 王		えい 永	えん 遠	うん 運	おん 温	おう 翁	
b [p]	はん 般	ほう 邦	ほん 本	ほう 崩	ひん 賓	びょう 病	へん 変										
p [p']	はん 畔	ぼう 傍	ほん 盆	ぼう 膨	ひん 貧	へい 平	へん 篇										
m [m]	まん 満	もう 盲	もん 門	めい 盟	みん 民	めい 名	べん 勉										
f [f]	ぼん 凡	ほう 方	ぶん 分	ほう 奉													
d [t]	たん 誕	とう 当		とう 等		てい 定	でん 電		たん 短			どう 動					どん 鈍
t [t']	たん 談	どう 堂		とう 疼		てい 庭	でん 田		だん 団			どう 同					とん 豚
n [n]	なん 男			のう 能		ねい 寧	ねん 念	じょう 娘				のう 農					
l [l]	らん 欄	ろう 廊		れい 冷	りん 林	れい 零	れん 联	りょう 良	らん 乱			りゅう 隆					ろん 論
g [k]	かん 幹	こう 綱	こん 根	こう 更					かん 関	こう 光	きょう 共						
k [k']	かん 刊	こう 康	こん 墜	こう 坑					かん 款	きょう 狂	くう 空						
h [x]	かん 汗	こう 航	こん 恨	こう 恒					かん 還	こう 荒	こう 洪						こん 婚
j [tɕ]					きん 金	せい 精	けん 見	こう 講				けい 焔		くん 君			
q [tɕ']					しん 親	せい 青	せん 千	こう 腔				きゅう 穹	ぜん 全	ぐん 群			
x [ç]					しん 信	せい 星	せん 先	そう 相				きょう 胸	けん 軒	じゅん 循			
zh [tʂ]	せん 戦	しょう 章	しん 針	せい 征					せん 専	そう 壮	ちゅう 中						じゅん 準
ch [tʂ']	さん 産	じょう 常	ちん 陳	しょう 称					せん 川	しょう 床	じょう 懂						しゅん 春
sh [ʂ]	さん 山	じょう 上	しん 身	せい 声						そう 双							じゅん 順
z [ts]	さん 暫	そう 葬		そう 憎					たん 賺		そう 宗						じゅん 遵
c [ts']	さん 参	そう 蒼		そう 曾					さん 纂		そう 聒						そん 村
s [s]	さん 散	そう 桑	しん 森	そう 僧					さん 算		そう 松						そん 孫
r [ʐ]	ぜん 然	じょう 壤	にん 人	じょう 仍													じゅん 潤